



## 意味を問うこと・問えないこと(退職によせて)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 秀子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9363">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9363</a>



## 意味を問うこと・問えないこと

中村 秀子

食生活分野を担当して『ガンにならない食事』等の本をたくさん見たり積んだりしておきながら、何の覚えもないまま「舌ガン」とのことで、2001年1月に入院治療、3月に舌右半分を切除、皮膚を移植するという大変な手術を受けました。前期には卒業のかかった授業もあって、ようやく6月から大学に出てきました。手術後のいろいろな不都合の中でも発音が不明瞭という状態のまま、諸先生方は勿論、学生の皆さんにも大変ご迷惑をおかけしたことを申し訳なく思っております。分校の公務分掌でもご配慮いただき、本当に有難うございました。何も知らないままの本人が一番楽天的でしたが、お陰様で4年間再発や転移もなく無事過ごすことができました。

退職の意向はお伝えしてあったのですが、時期が北教大再編の進行と重なってしまい人事凍結への対応等で、生活科学科教育の先生方には大変なご苦勞をおかけしてしまいました。

副学長を始め諸先生方のご尽力のお陰様で、17年度以降の授業の見通しもつけていただき、感謝致しております。

2002年7月号の『家庭科教育』に、三重大学の乗本秀樹先生が「家庭科の人的意味を探ろう」が載っていました。一部ですが、引用させていただきます。

すなわち、あらゆる教科に「驚きという非実用性+生活に役立つ実用性」の二面が備わる。そして、実用性が表面に現れやすい教科もあれば、表れにくい教科もある。受験やテストの圧力とハードなトレーニングのなかで、実用性と驚きがともに忘れ去られがちなのが数学や英語であろう。逆に、非受験の実用教科という先入観のもとで、驚きが忘れられがちなのが家庭科である。ここでいう「驚き」は、びっくりすることと完全に同義なわけではない。それは、ある種の謙虚さのもとで生活世界への洞察を深める、自己の可能性を自覚する、あるいは新しい価値観を宿らせるきっかけである。驚きの一つ一つが、いわば自己と生活世界の再発見なのである。また、率直で新鮮な感慨をもって驚けることは、それ自体、きわめて切実な「生きる力」でもある。こうした意味で、多様な質の驚きの機会がバランスよくちりばめられていてこそ、学校教育は有意義である。

ただし、驚きを生み出すこと自体を授業の目的とする必要はない。なんらかの問題解決に夢中で取り組むなかで、おのずと体験されることだからである。もちろん、「おのずと」とはいえ、教師は驚きの内容をおおよそ予知していなければならぬ。その意味で、家庭科教師は教科内容について高度にプロフェッショナルでなければならぬ。もちろん、人的意味の探索源は「驚き」だけではない。したがって、なるべく多くの面から考えてみるべきであろう。こうした試みを積み重ねるにつれて、「本来、家庭科は楽しい教科である」ことのゆえんが明らかになるであろう。(一部略)

人的意味を問うことを考えていた時、「冬のソナタ」の中で主人公が「好きというのに理由はないのです」とさりげなく言っていた言葉が、まさに「驚き」と一緒にここに突き刺さりました。人間・生活者としての私たちにとって大切な「情・こころ」は、問うものではなく深めるものであることに気付かされました。

これからの暮らしの中で、「知」と「情・こころ」のバランスを考えることを通して自己と生活世界の再発見を追及していきたいと思っています。